

ふるさとの水辺づくりを目指して

- 水辺の観察と水質測定 -

みやぎ生活協同組合 田中 美恵子

はじめに

みやぎ生協では、これまでリサイクル活動や環境測定活動など、市民レベルでできる環境保全活動を積極的に取り組んできた。特に、環境測定活動は身近な環境の変化や現状を知ることにより、ライフスタイルの見直しを考える良いきっかけとなっている。「水辺の観察と水質測定」もこのような環境保全活動の一環として、1992年に開始された。

水質の簡易測定で始まった調査活動であったが、水の汚れだけの評価では、ふるさとの水辺として愛着の持てる水辺なのかどうかについて評価を行うことができなかった。そこで、ふるさとの水辺としてどうなのかを参加者に感じ取ってもらうために、人間の五感を使った評価方法を取り入れた。こうして集められたデータをもとに、流域別の水辺マップを作成するなど、ふるさとの水辺としての情報の提供を試みてきた。

また、流域にかかわる行政、他団体との交流の場が設けられたり、学習会、見学会が行われるなど、水辺の調査活動がきっかけとなり、地域でいろいろな水環境保全の取り組みが行われるようになった。

今後は、河川法の改正にともない、住民参加の機会も増えることを視野に入れながら、愛着の持てるふるさとの水辺作りを目指して活動を進めていきたいと考えている。

県内全域の水辺情報の集積

これまでの7年間で69河川、15湖沼、9海域において調査が行われ、参加した人数は延べ3,180名となった。家のすぐ前の小さな川やいつも通学の途中で見る河川など、日頃、参加者が生活の場で親しんでいる河川から、あまり行っ

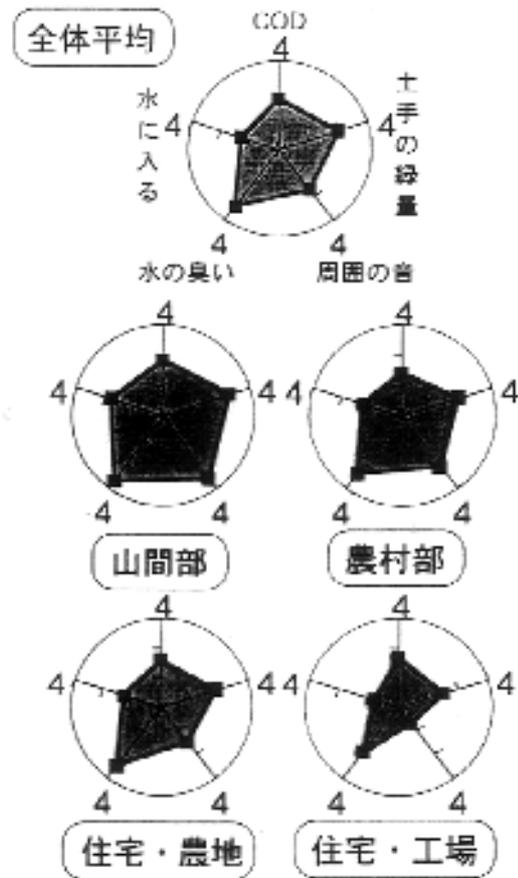


図1 タイプ別水辺の評価

たことのない大きな河川まで、広範に調査が行われてきた。こうして7年間に集まった多くの水辺の情報は、宮城県内全域を網羅するまでとなり、今後の水辺づくりの貴重な資料となっている。

五感で感じ取る評価方法

多くの人に愛着が持たれる水辺づくりを行うためには、どのような水辺の情報が必要なのか、どのような評価方法が良いのかについて検討をおこなってきた。当初、COD（化学的酸素要求量）、亜硝酸の簡易測定法を用いた水質調査を

主に行ったが、これだけでは水辺環境の良い・悪いを総合的に評価することはできなかった。

そこで、人間の視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感を使い、水辺環境を総合的に感じ取る評価方法を取り入れた。「土手の緑量」「周囲の音」「水の臭い」「水への入りやすさ」など15項目について五感を使い評価をおこなった。

さらに、水辺の満足度を知るために、「水に親しめる場所」「景観を楽しめる場所」「子どもの遊び場所」「災害時に備えて」の4項目についての評価も行った。

その結果をもとに参加者自身にレーダーチャートを作成してもらい、観察地点の水辺がどのような特性を持っているのかについて検討を行った。(図1)

点から流域への広がり、調査活動も回が重なるにつれ、「上流を見てみたい、河口はどうなっているだろう」と参加者の水辺への関心が高まった。グループや家族で、上流から河口まで、流域全体を見る水辺の観察会が行われるようになった。

また、グループによっては毎年、定点測定を行い、経年的に水辺の観察を行っているところもある。

こうして、調査地点が点から、流域全体へと広がりを見せ、水辺の情報が多く集まるようになった。集められた情報は、流域別に整理され、流域全体で水辺の評価を行うことができるようになった。(図2)

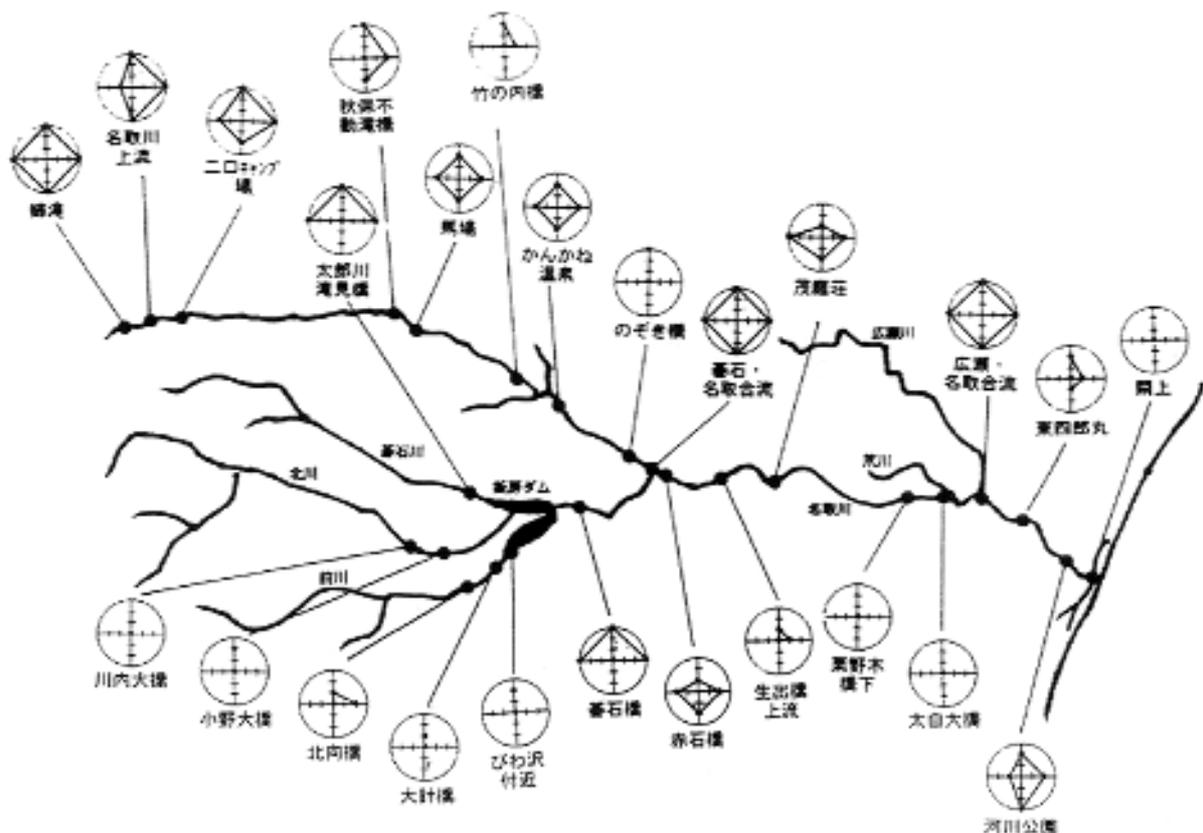


図2 名取川水系の水辺の評価(満足度)

ふるさとの水辺づくりを目指して - 水辺の観察と水質測定 -

みやぎ生活協同組合 田中 美恵子

子ども達の環境教育の教材として

「学校周辺の環境に興味を抱かせるには格好の教材」「川のみならず、周りの環境の様子を再確認する良い機会」「保健委員会の生徒達の活動の一環として取り組んだ」など、環境教育の教材として活用されることが多くなった。(写真1)

将来を担う子ども達が、水辺環境に愛着を持つことは大変重要なことと思われる。これまでの調査で、子ども達の持つ水辺の原風景と、大人を持つ原風景に違いが見られたことは心配なことである。調査活動をきっかけに、子ども達が水辺に出かけ、ふるさと体験を多く積み、水辺に愛着を持ってもらいたいと考えている。

また、年々、子ども達の参加が増えることにより、これまでの調査ではあまり明確に出なかった大人による評価と、子ども達による評価に差が現れた項目がいくつか見られ、子ども達と水辺との関わり方に、いくつか問題点があることが分かってきた。子ども達に水辺で親しんでもらうためには、これらの問題点も解決して行かなければならないと思われる。

水辺マップ作り

寄せられた多くの情報をもとに、水辺のマップ作りを行った。五感を使った水辺の総合評価、水辺の満足度についての調査結果、測定地点で観察された水生生物、水辺の風景や調査の様子、近くの公園、名所、文化遺産など、多くの情報を盛り込み、ふるさとの水辺としての情報源となるように編集を試みてみた。98年には、「私の紹介したい川」として一般に知られていない、地方の小さな川の紹介を行った。(図3)

今後は、これまでに寄せられた水辺づくりへの意見や、子ども達の「水辺でやってみたい遊び」のアイディアなどを取り入れ、ふるさとの



写真1 子ども達の水辺観察

水辺として、多くの人々が利用できるような水辺マップの作成を目指している。

行政との交流会

調査活動がきっかけとなり始まった、「鳴瀬川・吉田川環境サミット」も、昨年で6回目となった。上流から下流までの流域に住む人々と行政とで、お互いに協力し合い、河川の水環境保全を進めていくことを目的としている。これまでに、両水域に関わっている行政、JA、漁連、自然保護団体などとの意見交流会や、パネルディスカッション、水源や湾の見学会、水質調査などを行ってきた。

こうして、サミットは流域全体の現状を知る場や情報交換の場として、多くの役割を果たし、流域全体で水環境の保全に取り組む良いモデルとなっている。

今後は、これまで集められた流域別の多くの情報をもとに、このような活動が、他の河川でも取り込まれるように働きかけていきたいと考えている。

地域での活動の広がり

夏休みを利用した親子エコ教室や、浄水場な



図3 私の紹介したい川〔第7回宮城県内の「水辺の観察と水質測定」報告書（1998年度）より〕

どの施設見学会が行われている。このように調査活動ばかりではなく、施設見学などを行うことで、毎日飲んでいる水がどこから来て、どのような処理がされ、どこへ行くのか、実際に自分達の目で確かめることによって、水環境保全の大切さを考える良いきっかけとなっている。

また、産業廃棄物処理場問題で悩む地域では、水環境に対して関心が高く、大人から子どもまでを対象に幅広い学習会が行われている。幼い子ども達には、環境絵本の読み聞かせやゲームを利用した楽しい環境教育が行われている。

こうしているいろいろな地域で、その特性に合わ

せ幅広い活動の輪が広がりつつある。

まとめ

これまでの調査結果によると、大人も子どもも水辺を利用することが極端に少ないことがわかった。水辺体験の少なさは、水辺環境への関心の低さにつながり、子ども達の原風景にも、大きく影響をあたえたと考えられる。

愛着の持てるふるさとの水辺づくりには、まず大人も子どもも水辺をおおいに利用し、水辺に親しむことが大切と思われる。こういった面で、調査活動は、人々が水辺へ出かける良いき

ふるさとの水辺づくりを目指して - 水辺の観察と水質測定 -

みやぎ生活協同組合 田中 美恵子

っかけとなってきた。

これからは調査活動ばかりではなく、多くの人々が水辺へ足を運べるような場の設定、わかりやすい情報提供の工夫、楽しめる水辺マップ作りなどを行い、愛着の持てるふるさとの水辺づくりを目指して行きたいと考えている。

また、調査がきっかけで始まった地域での小さな活動が、流域ごとに集まりを見せており、今後は、地域でのネットワークづくりに求心的な役割を果たして行きたいと考えている。
